

## 入来院貞子さんの

### 足跡から国体を考える



中西 喜彦

#### 一、貞子さんの足跡

##### ○お別れして早や五年目

初めてお会いしたのは、平成二十二年三月であった。お亡くなりになったのが平成二十三年五月なので、わずか一年二ヶ月のお付き合いであった。筆者は追悼号(二十三年九月)の編集後記に「貞子さんとの別れは辛いけど、本誌で再会しましょう」と記した。本当にその通りになって驚いている。

八号で長女久子さんの額紫陽花の思い出。九号で次女洋子さんの鶴瓶師匠「貞子さん三回忌」落語法要所感。十号では有村美緒子さ

んによる第一回入来薪能スケッチ(当時の南日本新聞掲載)を再掲させて頂けた。ついでに入来薪能の全演目を整理して掲載することが出来た。さらに、「貞子が語る入来文書」および茅門のある町から——」二冊の本も紹介出来た。筆者はこれらを見てやっと貞子さんの入来移住の真意を理解出来たように思ったのである。

##### ○貞子さんと入来薪能

平成六年夏定年退職後東京より入来に移住。平成十年渋谷氏下向七百五十年イベントを成功させ、翌年十一月に第一回入来薪能を開催されている。第一回能「天鼓」を皮切りに、清経、鳥追舟、屋島、忠度を毎年公演し、闘病のため五年休演後平成二十二年に巴を公演され、翌年身罷られている。

特筆すべきことに、鳥追舟は物語の舞台が薩摩川内市の日暮の里であることから、清色

城趾ならぬ薩摩川内市総合運動公園多目的広場で公演されている。さらにそれを記念して鳥追の母子像をJR薩摩川内駅前に建立されている。

その他に文芸誌「火の鳥」の会員として、歴史上の人物の紹介、入来文書の解説をされている。また、真心短歌会を立ち上げ美しい日本語の普及に尽くされている。以上貞子さんの郷里移住後の足跡を要約した。すなわち、祖廟の地入来の町興し事業をご夫妻で実行されたことが良く理解できる。

### ○入来新能の意味

貞子さんは生前入来院家と相良家が日本で一番一箇所に定住期間が永いと言って居られた。特に鎌倉時代から江戸時代にかけてはそれを反映して他家にくらべると、記録文書が良く保存されていた。それが周知のエール大学教授朝河貫一博士の「入来文書」となっ

て公表されている。

筆者の疑問はなぜ町興しに新能かと言うことであった。それが本誌十号で演目を改めて並べて見て初めて理解できたように思った。能の曲目は二百曲程あり、五つのジャンルに分けられるが、その中で上演された曲名は、修羅物（二番目）と雑能（四番目）ものである。能の代表する幽玄美を示す三番目ものは一番もない。それは入来を始め中世の世界はこのような世界だったと言う紹介ではなかったかと思うのである。

貞子さんは早稲田大学文学部史学科国史専攻と言うキャリアを持っておられる。歴史的な視野からの一連の町興し事業は知恵と自費で行われた余人を許さぬ仕事である。一昨年来薩摩川内市入来麓の町興し事業は億を超える公費を使われたと聞く。箱物を作って魂を入れずの状況と比べると貞子さん一連の事

業の質の高さを思うのである。

入来が誇るべき点は茅屋根や茅門ではない。貞子さんの狙いは鎌倉、室町、安土桃山、江戸と約六百年を入来院家で入来周辺を統治した秘訣を研究することにあつたように思われる。入来文書の研究には日本の封建制度とヨーロッパの封建制度の違いとして克明に整理されている。演能を通じてはその時代の合戦や統治の様子などを、勝者と敗者、家長と家来の心理まで含めて示しなかったのではないだろうか。これらの事実を入来町の人々と共有し、世界一長期間団結の続いた町として今後の入来の町興しを目指したものと推察するのである。

さらに、これを推し進め今後の国のあり方について入来から発信しようと考えられたと思う。何者にも遠慮せず自由に意見を開陳出来る本誌「炉ばたセイ談」はそのツールであ


薩摩川内市指定文化財

鳥追の杜

昭和六十年三月二十七日指定

薩摩川内市教育委員会

管理者 薩摩川内市



昔、日暮岡に「日暮長左衛門」という長者が、住んでいた。長者の家臣横瀬左近尉は、奸策をもつて奥方柳御前を離別させ、その後左近尉と通じたお熊を入れた。長者には、柳御前との間にお北と花若の二人の子もがいた。やがて訴訟のため長者は都に上つて長い間帰らなかつた。

その留守中左近尉とお熊は、二人の子どもたちを虐待し、姉弟を鳥追舟に乗せ、太鼓を叩いて毎日水田の水鳥を追わせた。姉弟は人目を忍んで母合の渡して川を挟んで、母の柳御前と対面した。連日の虐待に耐えかねた姉弟は身をはかんで平佐川に身を投げた。村人たちは、これをあわれみ、この地に塚を建て、ねんごろにその霊を弔つた。

謡曲の「鳥追」はこの伝説にちなんだものである。

水鳥を追ひし跡とて名もくちず  
松翁（北郷家）  
のこるしるしのもりの一むら  
十代久瑛

平成十二年三月

『鳥追の杜』案内板（薩摩川内市鳥追町）

る。貞子さん没後五年目にあたり、入来薪能で中世を考えようとしたように、謡曲を題材に我が国のあり様について考えてみたい。

## 二、謡曲「鶴亀」について

鶴亀や高砂は年初めや結婚式などで披露される有名な謡曲である。今度の第三〇回国文祭鹿児島大会（十一月四、五日）で、宝生流の参加者約五十人が鶴亀を謡う事になった。改めて謡本を良く見ると素直な疑問が浮かんできた。何故唐の玄宗皇帝賛歌かと言う事である。

そこで、十年程前に購入した「謡曲の中の九州王朝（新庄智恵子著）」を取り出し読んでみた。

それは古田武彦氏が長年唱えられている「多元的古代研究」「大和朝廷に先立つ九州王朝あり」と言う説である。新庄氏の意見を要

約すると、鶴亀の内容は九州王朝のあった千代やその後は太宰府から仲哀天皇や、神功皇后の祀られている香椎廟に元旦参詣に行き、祝賀の舞を舞い、帰路の途中駕輿丁（地名）で御輿を早めて無事お帰りになったと言う意味だと言うことである。

能では五十分の所要時間だが、素謡では十二分の曲なので、少し我慢して本文を読んで頂きたい。

アイの玄宗皇帝の宮廷であると言う宣言の後、演技が始まる。

シテ 「それ青陽乃春になれば。四季の節会の事始めワキ 「不老門にて日月乃。光を天子の叡覧にてシテ「百官卿相に至るまで。袖をつらね踵をついでワキ 「其数一億百餘人シテ 「拝をすゝむる万戸の声ワキ 「一同に礼する其音はシテ「天に響きて夥し地

「庭の砂ハ金銀の。庭の砂ハ金銀の。玉を連ねて敷妙の。五百重の錦や瑠璃の枢。シヤコ  
 の行桁瑠璃乃橋。池の汀の鶴龜は。蓬萊山も  
 餘処ならず。君の恵ぞありがたき。君の恵ぞ  
 ありがたき。ワキ「いかに奏聞申し候。毎  
 年の嘉例のごとく。鶴龜に舞せられ。其後月  
 宮殿にて舞樂を奏せられうずるにて候。地  
 「龜八万年の齡を経て。鶴も千代をや。重ぬ  
 らん。地「千代のためしの数々に。千代の  
 ためしの数々に。何をひかまし姫小松。緑の  
 龜も舞ひ遊べば。丹頂の鶴も一千年の。齡を  
 君に授け奉り。庭上に参向申しければ。帝も  
 御感の餘りにや舞樂乃秘曲ハおもしろや。地  
 「月宮殿の白衣の袂。月宮殿の白衣の袂の  
 色々妙なる花の袖。秋ハ時雨の紅葉の葉袖。  
 冬ハ冴えゆく雪の袂を。ひるがへす衣も薄紫  
 の。雲の上人の舞樂の声々に霓裳羽衣乃  
 曲をなせば。山河草木國土ゆたかに千代萬代

と。悦び給へば官人駕輿丁御輿を早め。君の  
 齡も長生殿に。君の齡も長生殿に。還御成る  
 こそ。めでたけれ

新庄氏の根拠は本文末尾の駕輿丁と言う  
 地名が太宰府と香椎廟の間にあると言うこと  
 である。ネットで調べると駕輿丁と言う地名  
 は全国で一箇所だけのようである。糟屋郡の  
 駕輿丁公園として残っており、その中に駕輿  
 八幡神社が祀られていた。ご祭神は神功皇后  
 である。

神社の説明文では当地は天皇の蓮台を担  
 ぐ人達の住む部落名として「駕輿丁」が伝え  
 られている。これからは私見であるが「官人  
 駕輿丁御輿を早め」を「官人も駕輿を担ぐ人  
 も御輿を早め」ではなく、官人達は「駕輿丁」  
 部落に差し掛かると「隊列を整えて、元氣よ  
 く」御輿を早めと解釈する方が自然な気がす

るのである。

さらに、新庄氏は最後の地謡の「白衣の袂」を唐の皇帝が着る筈はないと言う。神主さんが佐賀錦を羽織ったような姿である。また、鶴と亀は九州王朝の象徴であると言う説である。

文献で調べてみるとどうも玄宗皇帝の場合金色赤色の派手な衣装である。白衣はそぐわない。また、象徴は龍であって鶴亀ではない。その爪は唐朝で五本、周辺国では四本だったたり、三本と定められていた。それ程象徴に厳格な唐の皇帝が異国の象徴を元旦から用いるだろうか。筆者は古田武彦氏の研究による君が代同様、これも九州王朝賛歌であると確信したのである。国歌では「千代に八千代」とあるが鶴亀は「千代萬代」である。博多に県庁所在地に隣接して千代町があり、古代宮殿があったとも言われ、千代と言う言葉は目

出度の言葉である。八千代は単に修飾語との解説があり、萬代もそれに類することばと考えられる。

ではどうゆう事情で一見玄宗皇帝賛歌のようになったのであろうか。本当の理由は不明であるが、背景は少し理解できた。ご紹介して、読者の意見を待ちたい。

### 三、我が国は二度占領された

今まで歴史の教科書で教えて来たことと全く違う考えであるが、近年の遺跡年代鑑定技術の進歩や諸古代遺跡の発見により、一層強化された古田氏の多元歴史研究成果は素晴らしいものがある。これに、昔から読み継がれている魏志倭人伝を始めとする中國正史にかかれた史実と照合すると古代の違った世界が展開する。

高橋良典氏は次のようなことを述べてい

る。「古代の日本が六六三年の白村江の戦いに敗れてあと、中国の占領支配を受けたことは『日本書紀』の天智天皇の条の中にそれとなく記されている。すなわち、天智四年（六六五）年の記事では、この年、日本へやってきた唐の使節団の人数が二五四人であったのが、同八年と九年には二千人に膨れあがっている。天智八年十二月の条には・・・大唐郭務悰等二千餘人を遣わしてこらしむ・・・このことは、唐の使者が唯の使者でなく、占領司令部の要員であったことを暗示している。

さらに、天智六年には太宰府が「筑紫都督府」と言う名前に変わっており、唐の軍隊が高麗と百済の都を占領したとき、「平壤都督府」、「熊津都督府」と称していることから唐による日本占領支配の拠となっていたと述べている。

このことはより詳しく古田氏とその調査

研究グループで明らかにされている。しかし、高橋氏の真骨頂はこの時から日本の都城や古墳の設計単位が高麗尺から唐尺にかわり、中国東北部と朝鮮半島、日本を占領した唐の軍隊がこの地域に伝わる固有の文字資料をことごとく抹殺し、漢字でかかれたもの以外は後世につたえないようにしたと述べていることである。それ程厳しい文字環境の中で生き延びた賛歌である。

### ○何故鶴亀では玄宗皇帝賛歌になったのか

玄宗皇帝が即位したのは七二二年であるから白村江の戦いから約五十年後になる。この間、皇帝は海戦時の高宗からその妻の則天武后となり、国名も周と変えている。それから玄宗の時に唐に復活した。言わば唐中興の祖であり歴代皇帝の中でも在位期間が一番長い。言わば唐朝の第一人者である。その頃我

が国も唐文化の影響を一番強く受けたと考えられる。

一方我が国の方は白村江の戦い以後倭国から日本国誕生の七〇一年まで唐戦勝軍は倭国に六回進駐したとの記録があり、三十九年間は直接支配されたとの見方がある。さらに、天皇の住居と言う意味の紫宸殿が太宰府には地名としても残っているのに、近畿王朝の平城京（七一〇）や難波京（七四四）までは残されていない。中国唐朝の権威に抗しきれず使用出来なかったとの指摘がある。平安京（七九四）で軀がとれたとの見方がある。

そのようなことから、主は筑紫王ならぬ玄宗、場所は博多から太宰府、象徴は鶴亀松として、密かに歌い継いだものが採譜されたものと考えられる。まさに隠れキリシタンの仏像のようである。

一方、謡曲に白楽天という曲目がある。こ

れは唐の詩人白楽天（ワキ）が日本人の知恵を試すために松浦瀉に現れる。漁翁（前シテ）と漁夫がこれを迎えて、白楽天の正体を当て驚かす。白楽天が詩をつくると、和歌を詠み、日本では人間だけでなく、生あるもの全てを詠むと自慢する。住吉明神（後シテ）が現れ「海青楽」を舞って神力を示し、白楽天に帰国せよという。

さらに、伊勢や石清水の諸神も加わって舞を舞い神風を起こして白楽天を追い返す物語である。

万葉集が大伴家持により完成されたのが七七八年である。「長恨歌」で有名な白楽天（白居易、七七二〜八四六）が生まれたころにはほぼ日本国独特の表現法を獲得しており、漢字文化から換骨奪胎で我が国特有の表現を確立しており、このような曲目も出来たのであろう。



### ○移動型と定住型の国

我が国が占領された唐と米国は主体が牧畜民族である。これに対して我が国は稲作民族と言われている。この二つの生産形態から来る思考はことなっており、お互い理解できないところがある。例えば牧畜では多頭数の家畜を一年間に亘って給餌飼育しなければならぬ。一方稲作では季節に従って苗を植えたり収穫したりする。移動型と定住型の違いとも言える。

勿論現代は農作業ばかりではないが、タイプとしては鶴が移動して、餌を採るのに対し亀のように一つの池の中で間に合わせる生き方がある。

生き方を環境要因とすると鮮卑族とかアングロサクソン族のような遺伝的要因もまた重要性をもつ。戦争となると東西の歴史で北馬系が南船系より勝利してきた。やはりその

特徴は家畜の大群を常に移動管理する技術に繋がる兵站の上手下手の差によることが大きいように思われる。

現在の中国について岡田英弘氏は中華人民共和国を「盗賊団」共産党王朝であると述べている。また、歴代王朝の繰り返す古代しかないとも述べている。一方、米国も多民族国家であり金融資本、民族、統治にも矛盾が大きい。馬淵睦夫氏の国際金融資本に乗っ取られた国との意見もある。

このような前門の龍、後門の禿げ鷹のような二国に挟まれてわが神国（亀國）は敵の正体を良く見極める必要がある。一つの池の中だけの考えでは第三の敗戦を招くことが考えられる。



#### 四、戦後七十年と日本の今後

執筆当初貞子さんが考えておられたように、入来文書の研究から中世日本のあり方、その具体的な有様を謡曲の中に見つけようと考えた。しかし、同じ謡曲と思つて鶴亀を調べ始めて大きな地雷原に突き当たってしまった。今まで正しい古代史として取り上げられなかった多元史観である。かなり以前からおとぎ話の中に実は古代の歴史が封印されていると言われてきた。能はそのような言い伝えや昔話を下敷きに作成されているものが多い。特に、能楽の詞章は「江戸時代手を加えず保存されていたため」、内容的に明治時代後の影響を受けていない歴史の完全資料である。鶴亀や白楽天で示される内容は六世紀から八世紀にかけての日中の状況を示唆しているように考えるものである。改めて能の奥深さに気が付かされた。中世以上に未知のことが多い。

今年は戦後七十年を迎える。「白村江の戦いによる敗戦」と「大東亜戦争敗戦」とを比較することは大変意味あることと考える。丁度村山談話が出た戦後五十年に、白村江敗戦の後、約五十年後に皇帝になった玄宗皇帝の宮廷賛歌が出来たことになっている。七十年後では第九次遣唐使が難波津から出発している。皇居に関する紫宸殿の言葉が使えるようになるのは平安京遷都の白村江の戦いから一三一年間要している。

現在我が国では戦後七十年を迎え今後の国の方向性を模索中である。今度厚木飛行場の自衛隊機夜間飛行差し止め判決が高裁から出された。ところが米軍機に関してはその限りでないという。横田基地の管制問題も随分前から石原慎太郎氏が指摘されながら未だ解決されていない。これだけみても日本國の米國からの自立は完了していない。國を守つても

らうなど言うことそのものに誤解があるように考える。

今の国会討論やその周辺、マスメディアの状況をみると目先の問題だけを挙げ連ね全体としての方向性が示されていないように思われる。

一方、室伏志畔氏は幻想史学と言う概念を提案している。七世紀と二十世紀は東アジアが激動した時代であり、倭国と日本が敗北した世紀である。その結果、記紀と平和憲法を招来したが、東アジア史の中で考えてきただろうかと言う疑問を呈している。詳細は歴史家に譲るとして、七世紀は唐の東アジア支配に対する、日本の対応であった。即ち、三韓征伐といわれるように朝鮮半島に橋頭堡を持つていた倭国が唐と三韓の干渉から抜け出して日本書紀の編纂で一元的天皇制を確立した世紀であった。以後秀吉の朝鮮征伐までの約

七百年は自分の方からは戦争をしなかった。

一方、二十世紀は新興国米国の東アジア支配に対する我が国の対応であった。これを平和憲法制定で方向付けようとしたが、またもや朝鮮戦争で再軍備を行ったのは地勢的なのであろうか。

## 五、おわりに

歴史は繰り返すと言うのが一面当然なことと考えられる。人間は世代交代することにより経験はリセットされる。遺伝子は変わることはなく、民族として特徴をもっている。そうすれば民族としての特性が地勢とともに大きな流れを作ってきたのである。

能「鶴亀」では玄宗皇帝に平身低頭した。もつとも面従腹背ではあったが。「白楽天」では、唐の文化代表白楽天に対して、我が国では漁夫のようなものから、あらゆる自然まで

和歌を読むと神風で唐に追い返した。日本文化の復活宣言である。「草木国土悉皆成仏」の思想である。そこまで行くのに、白村江の戦いから約百二十年はかかっている。しかし、現代的には「自然との共生」などと言われているが、我が国のあるべき姿はこの思想に帰依するのではないだろうか。

戦後七十年、在日米軍にお引き取り願うのは何時の日になるだろうか。言葉は文化の根源である。小学生から英語を学ばせようと言う人々がいる限り、占領軍を米国に追い返すにはまだ時間がかかりそうだ。

何れにせよ「龍や禿げ鷹」が乱舞する世の中よりも、「鶴や亀」の舞い遊ぶ世界をつくりたいものである。

(第三十回国民文化祭鹿児島二〇一五「能楽の祭典」企画委員長)



入院院夫妻と著者 平成22年(2010年)3月撮影